

第十四講 『紫式部日記』

次の文章を読んで、後の間に答えよ。

左衛門の内侍といふ人侍り。あやしうすすろによからず思ひけるも、え知

り侍らぬ、心憂きしりうごとの、おほう聞こえ侍りし。^①内裏のうへの、
* 左衛門の内侍といふ人侍り。あやしうすすろによからず思ひけるも、え知

源氏の物語人に読ませ給ひつつ聞こしめしけるに、「この人は日本紀をこそ

読み給ふべけれ。まことに才あるべし」と、のたまはせけるを、ふと推^A

しはかりに、「いみじくなむ才ある」と、殿上人などにいひ散らして、

日本紀の御局とぞついたりける、いとをかしくぞ侍る。このふる里の女
* 「いみじくなむ才ある」と、殿上人などにいひ散らして、

の前にてだに、つつみ侍るものを、さる所にて才さかし出で侍らむよ。^③

* この式部の丞といふ人の、童にて書読み侍りし時、聞きならひつつ、かの

人はおそう読みとり、忘るるところをも、あやしきまでぞさとく侍りしかば、

書に心入れたる親は、「、男子にて持たらぬこそ幸ひなかりけれ」と
10

ぞ、つねに歎かれ侍りし。それを、「男だに才がりぬる人は、いかにぞや、
* 書に心入れたる親は、「、男子にて持たらぬこそ幸ひなかりけれ」と

はなやかならずのみ侍るるよ」と、やうやう人のいふも聞きとめて後、

一といふ文字をだに書きわたし侍らず、いとてづつに、あさましく侍り。
* はなやかならずのみ侍るるよ」と、やうやう人のいふも聞きとめて後、

(注) ※よからず思ひける…左衛門の内侍が紫式部のことを「よからず思ひける」

※しりうごと…陰口

※内裏のうへ…一条天皇

※日本紀…『日本書紀』などの歴史書

※ふる里の女…実家の侍女

※この式部の丞といふ人…紫式部の弟

※才がりぬる…学問をひけらかす

※てづつ…無学なようす

問一

傍線部①～⑥の助動詞は、左の語句群中のどの種類にあたるか。各々適当と思うものを一つずつ選び、その記号をマークせよ。同じ語句を何度選んでもかまわない。

- | | | | | | |
|--------|----------|--------|--------|----------|--------|
| (イ) 打消 | (ロ) 打消推量 | (ハ) 過去 | (ニ) 可能 | (ホ) 完了 | (ヘ) 自発 |
| (ト) 使役 | (チ) 推量 | (リ) 尊敬 | (ヌ) 断定 | (ル) 婉曲推量 | |

①

②

③

④

⑤

⑥

問二

傍線部A「推しはかり」とあるが、これは誰の行為か。

問三

傍線部B「いみじくなむ才ある」の言葉の裏には、どんな気持ちが込められているか。次の中から最適なものを選び。

- イ 友情 ロ 義侠心 ハ 賞賛 ニ 怒り ホ 嫉妬

問四

傍線部C「日本紀の御局」とは、誰を指すか。

問五 傍線部D「いとをかしくぞ侍る」とあるが、この「をかし」にはどのような気持ちが込められているか。次の中から最適なものを選び。

- イ 謙讓
- ロ 反発
- ハ 賞賛
- ニ 嫉妬
- ホ 敬意

問六 傍線部E「さる所」とはどこか。漢字二字で記せ。

問七 傍線部F「書」とはなにか。次の中から最適なものを選び。

- イ 和歌
- ロ 物語
- ハ 漢籍
- ニ 仏典
- ホ 書簡

問八 空欄□には、どんな言葉を入れたらよいか。次の中から最適なものを選び。

- イ をかしう
- ロ いぶかしう
- ハ 口惜しう
- ニ よろしう
- ホ おとなしう

問九 傍線部G「一といふ文字をだに書きわたし侍らず」とあるが、つまりはどうしたのか。次の中から最適なものを選び。

- イ 数をかぞえない
- ロ 名前を言わない
- ハ 文才の豊かさを示さない
- ニ 漢学の知識を示さない
- ホ 家柄をおおやけにしない

第十四講

日記

【平安】

土佐日記 紀貫之 935

最初の仮名日記。日記体による紀行文。

土佐の守(国司)の任期(任命されたのは930年60歳の時、任期は4年)を終えた紀貫之が承平四年1月21日土佐の館を出発し、翌年の935年2月16日に京の自宅に帰り着くまでの55日間の船旅日記。女が書いた形にして仮名文を用いた。文章の中で「あるじ・ある人・船君・父・翁」と出たら作者。冒頭は「男もすなる日記といふものを女もしてみむとてするなり」。任地土佐でなくなった愛児(娘)への悲しみ・船旅への恐怖・帰京の喜びなど。

蜻蛉日記 藤原道綱母

975頃 藤原兼家妻・藤原倫寧女。

最初の女性日記文学。↓苦悩に満ちた21年間の嫉妬

が中心の日記

20歳の頃に当時、右兵衛佐であった藤原兼家に見初められ結婚。愛人、町の小路の女、他7人に傾く夫、妻としての苦悩、我が子道綱(スーパーマザコン)へのひたむきな愛情。その詳細な心理描写は後の『源氏物語』にも影響を与えた。

和泉式部日記 和泉式部

1007 和泉式部と帥宮敦道親王との恋愛日記を物語的に描

いている。

主人公である和泉式部が第三人称(女)で書かれている。基本的に尊敬語が使われていたら、主語は男⇨敦道親王、謙讓語が使われていたら主語は女⇨和泉式部。

紫式部日記 紫式部 1010

中宮彰子(上東門院)に仕えた宮廷生活の見聞録。

彰子の土御門殿(道長の邸)での初出産、宮廷の生活や儀式。前半は記録文、後半は消息文(⇨手紙文)。

和泉式部、赤染衛門、清少納言の人物批判。

cf. 彰子の父は藤原道長、夫は一条天皇。

更級日記

菅原孝標女 1058

約40年の生涯の回想記録。13歳の時、父の国司の任期が終わり上総(千葉)を出発し上京する旅路、源氏物語を愛読した娘時代の生活、結婚生活、51歳になり夫と死別しさびしい境遇を述べて終わる。

すずろなり
そぞろなり

- ① わけもなく
- ② むやみやたらに
- ③ 思いがけない

あいなし
あぢきなし
うし
うたて
うとまし
こころうし
こころづきなし
むつかし

不快である・不愉快である
(マイナスイメージ)

こころうし 【心憂し】

- ① つらい
- ② いやだ
- ③ 情けない

きこゆ 【聞こゆ】

- ① 自然に耳に入る ↓ 聞こえる
- ② 噂される ↓ 噂 (評判) になる
- ③ 理解できる ↓ わかる
- ④ 〈謙讓〉 申し上げる

ざえ 【才】

- ① 漢学の知識
- ② 学問
- ③ 芸能 (書道・和歌・音楽)
- ①と②をまとめて学識 (漢学)

ふるさと 【古里・故郷】

- ① かつて住んでいた所・なじみの土地
- ② 実家
- ③ かつて都のあった所 || 旧都

副助詞

だに

類推(〜サエ)

軽いものを挙げて重いものを類推する「まして」を探す。
なければ「まして」以下を補ってみる。
ただ入試では「まして」以下を補えという問題は出題
されないから安心してくれ！

・田舎世界の人だに見るものを、

(Ⅱ田舎に住む人でさえ見る、へまして都の人なら絶対
見るのに)

最小限の願望(セメテ〜ダケデモ)

最小限の願望の意味のときには、「だに」の下に意志・
命令・願望・仮定がくることが非常に多い。

・御文をだに物せさせたまへ命令形

(Ⅱせめて手紙だけでもお書きなさい)

さへ

添加(〜マデモ)↓(Aに加えて)Bマデモ

・空のけしきなどさへ、あやしうそこはかとなくを
かしきを

(Ⅱ(地上の景色に加えて)空の様子などまでも、どこと
いうこともなく趣深いものを)

つつむ

はばかる

遠慮する



つつまし

遠慮される

気がひける

文中の

「ものを」は逆接

文末の

「ものを」は(逆接)詠嘆

くノニナア

さかし【賢し】

① 利口ぶる・小賢しい

② すぐれている・しっかりしている

ふみ【文・書】

- ① 手紙
- ② 書物→漢籍
- ③ 学問→漢学→漢詩文

あたらし
くちをし
くやし
ほいなし
をし

残念である

あさまし

- ① 意外である
- ② 驚きあきれる
- ③ 情けない

左衛門の内侍という人がおります。(この人が私を)不思議に(〓妙に)わけもなくよくないと(〓不快に)思っていたのも、(私は)知ることができません(でいましたが)、不快な(または、いやな)陰口が、たくさん(私の)耳に入ってきました。一条天皇が、源氏の物語を人(↓女房の誰か)に読ませなさっては聞きになつていた時に、(次は天皇のセリフ)「この物語の作者(〓紫式部)は日本書紀をお読みになつてはいます(または、「べけれ」を推量でとつて、だろう)。本当に漢学の知識(または学識)があるはずだ(または、「べし」を推量でとつて、だろう)」とおっしゃつたのを、(この内侍は)さつさと(勝手に)推量して(または、ねじまげて)、「(紫式部は)たいそう学識がある(んだつてねえ)」と殿上人などにいいふらして、(内侍が私に)「日本書紀の御局(〓日本書紀のお部屋ちゃん)」と私に(あだ名を)つけたのが、たいそう滑稽でございます。私は、実家の侍女の前でさえ、(学識を)遠慮して(または、隠して)おりますのに、(まして)そのような(宮中という)場所(で)学識を利口ぶつて表に出したりするでしょうか(しねえよバカ! なめんなよ!)。私の家の式部の丞という人が、子どもであつて(〓の頃に)漢籍を讀んでおりました時、(私はそばでそれを)聞き習いながら、式部の丞は讀み取るのが遅く、忘れている部分をも、(私は)不思議なほどまでかしく覚えまされたので、漢籍を重視していた親は、「残念なこと(に)、(お前を)男の子であつて(〓として)持たなかつたのは不幸であつたよ」といつもお嘆きでいらつしやつた。それなのに、「男でさえ学識ぶつてしまう人(〓学問をひけらかす人)は、どうであるるか、華やかでないばかりであるようですよ(ようするに、華やかに出世しないように見えると言いたい)。(まして、女はとんでもない)」と次第に人が言うのも耳に聞きとめて後、「一」という(いちばん簡単な)漢字をさえ書いて見せることもしませんで(まして、他の漢字なんてまったく知りません様子で)、たいそう無学で、驚きあきれるほどでございます。